

これでも僕は *Am I really your master?* ご主人様?

小説 天戸祐輝
挿絵 大神ゆうき

ダブルメイドに板挟み

立ち読み版



一章

メイドが押しかけてきたっ!?

二章

そんなことまでしなくてもっ!?

三章

テストのあとのご奉仕は……。

四章

スクミズならぬビキニ猫っ!?

五章

記憶の中の女の子っ!?

六章

両手にメイド、タマリマセンっ!

登場人物紹介

Characters



さくらあさえりな
桜朝恵莉那

晴樹の家にやって来た、金髪のツインテールが特徴のメイド。口が悪く晴樹にも罵詈雑言を浴びせることもしばしばだが、実は主人である晴樹のことをいつも気にかけている。



こひなあい か
湖雛藍香

恵莉那とともに晴樹の家に来たメイド。普段は温厚だが、怒ると実行行使に出たりなど実は危険な性格。豊富なバストが特徴的。

さきもとはる き
崎元晴樹

両親が祖父の家に引っ越したため、一人暮らしをすることになった少年。大資産家でもある祖父の命令でやって来たメイド二人に世話を焼かれることに。

「任せてください、ご主人さま」

ズボンからペニス飛び出した途端。愛撫を受けて大人びた美貌を蕩けさせて彼女の表情が、なにかのスイッチが入ったように変わり始めた。

潤んだヒスイ色の瞳は、どこことなく獲物を前にした肉食獣のような光を宿し、取り出したペニスをうっとり見つめてくる。

「こんなに大きくしてください……、ベッドに寝てください。ご主人さま」

「う、うん……」

彼女の手が勃起したペニスに触れ、くすぐったさを感じながら、流されるようにベッドに仰向けにされていく。

「私に、ご主人さまのを……」

見せるように黒いショーツを片足から引き抜いた藍香が、艶めかしい仕種で股間の上に跨ってきた。

下から見ると、彼女のすべてが覗け、まるで悪いことをしているような錯覚に陥る。

濃いピンク色の乳芽を尖らせる釣鐘型の美峰乳に、薄くて赤い草むら。そして、包皮から剥きでている女核も、うっすらと開いて秘孔を見せている淫部も丸見えだ。

晴樹の興奮はさらに高まってしまい、勃起しているペニスがビクンと脈動しながら、さらに太くなってしまふ。

「藍香、本当にいいの？」

「はい、もう気持ちいを隠せません……。ご主人さまに、大好きな方にセックスを教えるのは、私です」

決してメイドの務めではなく、私が好きな相手にセックスを教える。と強調した彼女が、そつと淫唇を割り広げながら、細腰を下ろしてきた。

ぐにゅ……。

「うおっ」

「ふぁんんっ！」

切っ先と秘孔が触れた瞬間。感電したような痺れがペニスから走り、思わず呻いてしまった。

彼女も同じように感じたらしく、挿入直前のまま動きをとめている。

「藍香……」

触れ合った性器同士を見る興奮に、肉幹が何度も脈打ってしまう。

自分のペニスが、女の子の大事なところに入る。その興奮に、今にも理性が吹っ飛んでしまいそうだ。

「私の……ご主人さまに私の初めてを……んっ、んあぁあっ!!」

「は、初めて……っ!!」

ここまで積極的だった藍香が、処女だったことに驚いている間もなく、細腰が下りてきた。

亀頭が小さな秘孔を押し広げたと同時に、敏感な部分から走ったムズ痒い刺激に声が出てしまい、緊張で身体が硬直していく。

彼女も初めての感覚に戸惑っているらしく、長いまつげをフルフルと震わせながら、瞳を閉じてゆつくりとお尻を下ろしてくる。

「大丈夫です……、ご主人さまですから、痛くなんて……くうんんん……」
「くっ……、すご、熱くて……絡まってくる……」

膣内の熱さと、無数に粒がついている膣襞が肉幹に絡まってくる感触に戸惑っている中、切っ先に薄い膜が触れてきた。

「んっ……はあはあ……、痛いのは最初だけですから、気にしないでください」
「ちょ、ちよつと待って藍香。僕がゆつくり……」

プツツ、ジュプジュプジュプジュプジュプッ!

「はくっ!? ひゃふうううううううううううううううううううう——ッ!」
「くうおおおっ!」

彼女任せではなく、これだけは自分から優しく破ろうとしたのだが、遅かった。

処女を捧げる決心をしていた藍香は、一気に細腰を下ろして処女膜を破り、大きな美尻を晴樹の股間に乗せてペニスの根元まで受け入れてくれた。

部屋には破瓜の痛みをこらえる声が響き、硬直したまま動かない肢体が、その激痛を伝えてくる。

しかし、そんな藍香を気にしている余裕はなど、今の彼にはない。

肉幹全体を包む膣壁の熱さと、優しく絡まってくる膣壁の感触に尿意にも似た痺れが走り、今にも射精してしまいたいような刺激が股間から全身に伝わってきた。

「はううッ、あッ、くうう……はあはあ……、ご、ご主人さま……ッ……」

「き、気持ちいいよ藍香。すぐよくて、もう出ちやいそうだっ」

痛さに呻くことしかできない彼女を見ながら、思わず呟いてしまう。

膣壁に締められ、膣壁に絡まれたペニスが激しいムズ痒さで包まれ、今にも出してしまいたいそうだ。

「う、嬉しいです。感じてもらえて……はあはあ……。動き……動きますご主人さま……はあはあ……。いつでも、いつでも出してください……。ッ。私の中に、ご主人さまの精液いっぱい出してくださいいいッ！ くうッ、はくッ、ンああッ」

ジュプッ、ジュプッ、ジュプッ、ジュプッ！

「くっ」

藍香が痛みをこらえながら腰を動かし、肢体を上下に動かしてきた。

部屋には淫らな挿入音が響き、ただでさえ初エッチの刺激に我慢している晴樹を、より強く興奮させていく。

「うあっ、くっ……そんなに、そんなに動かれたら僕っ」

「ふあっ、はくッ、ご主人さまが……ご主人さまが我慢してる顔、い、いいですッ！ は

ふッ……痛いのに……痛いのに気持ちよくなつてッ！」

破瓜の痛みがあるにもかかわらず藍香が長い赤髪を振り乱しながら喘ぎ、騎乗位の体勢で乱れ始めた。

普段の彼女からは考えられないが、どうやら藍香は責めることで興奮してしまつたらしい。騎乗位で肢体を上下させる度に速度が速まり、声から痛みの色が薄れている。

「す、すごいよ藍香……、くああッ」

全身を、処女まで捧げて奉仕してくれる彼女をとめることもできず、晴樹は流されるままエッチをし、射精させられそうになつてしまった。

「あ、藍香。藍香も気持ちよくなつて」

「えッ?! そんな……、ご主人さまさえ気持ちよければ、私は……」

ジュプッ! ジュプジュプッ! ジュプジュプジュプッ!

「ひゃふうううッ! はふッ、あふッ! 強い……はひッ、強すぎますご主人さま……私おかしく……おかしくなつちやいますうううううッ!」

いくら彼女が好きなタイミングで射精してもいいと言つても、このままでは終われない。さらにペニスを締め付けて膣壁と肉幹に絡まってきた膣襞の刺激に、晴樹は歯を噛み締めた。彼女から射精をこらえ、細腰を両手で掴んで思いつきり腰を突き上げた。

彼女からではなく、初めて自分から突き上げたペニスは激しく膣襞を捲り返して秘孔を貫き、肢体を浮き上がらせた藍香のメイド服を乱れさせてしまう。

「ふあッ、きやうんんんッ！ はふッ、あッ……ダメ……私が感じてはダメなのに……あうッ！ 申し訳ありませんご主人さま……私もう……もうううッ！」

メイド服をヒラヒラと揺れ動かす肢体が喘ぎ声を奏でる度に背中を仰け反らせ、上下に揺れ動いている美峰乳を天井に向け始めた。

赤い髪は発情汗で彼女の肌に張り付き、弾けるほど尖った乳芽が小刻みに震えている。

滑らかな腹部は、感じていることを告げるように波打ち。黒いニーソックスに包まれた美脚には、内腿筋が艶めかしく浮き出して痙攣を開始していた。

「すごい、きつく締まって……くあッ、出るっ、ほんとに出ちゃうよっ」

「はふッ、あッあッあッ、はひいいいッ！ 出して……このままッ、んっ……はあはあ……ご主人さまの……ください……私をご主人さまだけのメイドに……んんッ」

見ているだけでも射精してしまうような姿に、もう我慢の限界だ。

初エッチの快楽に喘ぐ彼女の膣内は秘孔から奥へと向かって蠕動し、肉幹を舐め溶かすように絡まって強烈な焦燥感を感じさせてくる。

彼女の肢体が大きな胸を揺らしながら上下に動く度に、ペニスはビクビクと脈打って肉幹が膨らみ、内部に濁液が駆け登っていく感触で頭の中が真っ白にされていく。

「も、もうダメ……もうダメですご主人さまッ！ 早く……早くください……はふッ、ご主人さまの精液で、はあはあ……お腹の中いっぱいにしてくださいいいいッ！」

「くあッ、くっ、うわあああッ」

藍香の言葉になにか答えようとするが、もう声にならない。

呻くように声を出し、大きな肉果実を下から鷲掴んで腰を突き上げるだけで精一杯だ。

頭の中は血でいっぱいになり、破裂するほど膨らんだペニスの切っ先から、断続的に先液が迸っていく。

「藍香の、藍香の中に僕のをっ」

限界を感じながらも、最後の力を使って肢体を突き上げ、揉んでいる大きな肉果実を根元から千切れるほど揺らさせる。

指の間から飛び出している乳芽は、小刻みに震えて汗を飛び散らせ。贅肉一つない滑らかなお腹が、精液を受け入れる準備を始めるように下から上へと波打った。

「きてください……きてくださいご主人さまああああッ！」

彼女の言葉がきっかけになったように、肉幹が強烈な焦燥感に包まれた。

自分の身体の一部とは思えないほどペニスが脈動して膨れ、塊のような濁液が一気に肉幹を膨らませて切っ先へと向かっていく。

「ごめん藍香っ、出る、出るよおとおっ！」

「は、はいッ、はふッ……ンあッ、あッあッ……ひやふうううッ!!」

びゅるるッ! びゅるるッ……びゅるびりりゅびゅるるるるるッ!

「んはあああッ! きてます……ご主人さまのが……いっぱいッ……いっぱいいいいいいいいいいいいいいい——ッ! ッッ!」



強烈な尿意にも似た痺れを感じた直後。まるで放尿してしまったように、藍香の膣内に白濁液を放出させてしまった。

我慢する。もつと彼女を感じさせたい。などという考えは、一欠けらもない。

そんなことすら考えられないほどの強烈な痺れが股間から走り、とまることなく精液が彼女の中に飛び散っていく。

射精と同時に絶頂したらしい長い赤髪の美少女も、背中を仰け反らせたまま肢体を硬直させ、詰まった吐息を繰り返しながら痙攣を始めている。

「くあつ、うつ、くあああつ！」

「はうツ、あツ、ンあああツ！　ンううううツ！」

自分の体液のすべてが精液になり、彼女の中に放出しているような錯覚すら覚える。

騎乗位のまま肢体を痙攣させ、大きな肉果実を小刻みに揺らしている藍香のお腹は、淫部からお臍へと向かって何度も波打ち、膣壁を絡めながら肉幹を扱っている膣内の様子まで伝えてきた。

「くあつ、くうううつつ！」

びゆるるるッ！　びゆるるるるるるるッ！

「ふあああツ！　ひゃんんんんんんんんんんんん——　つ！　はふツ……ああ

ツ……ひゃふツ！　あつ……はあはあはあ……はあ……」

最後の精液を搾り取られるように放出させた瞬間。秘孔からプシュツと愛液を噴き出し

た藍香が、崩れ落ちるように身体の上に倒れてきた。

大きな肉果実は、晴樹と藍香の間で潰れて広がり、荒い呼吸を繰り返す大人びた美貌が、悦楽に満ちた幸せそうな笑みを浮べている。

「はあはあはあ……藍香」

「んっ……んんっ……はあはあはあ……」

話しかけてみたが、長いまつげを震わせ、荒い呼吸を繰り返すだけでもなにも答えてはくれない。美貌を真っ赤にさせたまま、幸せそうな笑みを浮べているだけだ。

しかし、藍香が初めてのエッチで満足してくれたことだけは分かる。

温かい肢体は、発情汗にまみれながら甘い香りを放ち。ペニスを挿入したままの秘孔がヒクヒクと蠢きながら、膣全体を蠕動させて嬖を絡めてくる。

「藍香……」

「はあはあはあ……ご、ご主人さま……」

もう一度彼女に話しかけると、潤ませたヒスイ色の瞳を蕩かせた彼女が、やっと答え返してくれた。が、どこを見ているのかも分からない状態。

まるで夢の中に居るように呆然と晴樹を見つめ、荒い呼吸を繰り返しているだけだ。温かい肢体の体温を感じながら、彼女と見つめ合ったまま時間だけが過ぎていく。

二人の身体から噴き出した発情汗は、混ざり合ってベッドのシーツに流れ、エッチをした痕跡を刻むよう人の染みを広げた。

興奮を抑えられないその姿に、ペニスはズボンの中で膨れ上がってしまい、きつさを感じるほど硬くなってしまった。

「い、いいよ……はあはあ……今日は、今日はハルくんのを……」

涙をいっばいに溜めた瞳で見つめてきた彼女が、そつと太腿を開いて濡れたショーツを見せてくれた。

昨日と違って、今日は我慢する必要なんてない。

恥ずかしがる恵莉那のスカートを捲った彼は、そのままショーツに指をかけ、ゆつくりと引き下ろしていく。

透けた白い布が下がり、金色の薄い草むらと、包皮を被ったまま膨れ上がっている女芽が現れ、彼女の大事な部分まで見えてくる。

(すごいっ)

思わず、そんなことを思ってしまう。

濡れた彼女の大事な部分だけで興奮してしまうのに、淫部とショーツの間に愛液の橋までかかっていた。

「恵莉那って、こんなにエッチだったんだ」

「違うのに、わたしエッチなんかじゃ……っ」

金髪美少女の片脚からショーツを引き抜き、愛液で濡れ光っている淫部を見ながら言った言葉に、彼女が恥ずかしがりながら愛液を噴き出した。

「い、いくよ」

「い、言わなくて……。そういうこと言わなくていいから……」

淫部を見られて恥ずかしがる彼女の顔を見ながら、そつとズボンからペニスを取り出し、甘酸っぱい色気を漂わせる太腿を広げて腰を挟み込んだ直後。恵莉那が肢体をピクンと強張らせ、長いまつげを震わせた。

初めてを失う女の子としての反応。そんな彼女とやつとできるエッチに、晴樹のペニスはピクピクと脈動しながら先液を溢れさせ、ムツとした女熱が漂う淫裂に切っ先を押し付けていく。

「ひゃうっ!？」

ムチムチとした太腿の感触を腰に覚えながら、亀頭で淫唇を割り広げてクチュつと音を鳴らして、切っ先を秘粘膜に触れさせた瞬間。彼女が肢体を強張らせた。

自分から恵莉那に挿入する。初めてするときにはできなかったその体験に、ペニスで薄赤い秘粘膜を擦り、切っ先で処女孔を探しまわる。

「ふあっ、くすぐっ……きゃふっ」

敏感な部分を硬いペニスで擦られる刺激に、彼女が金色のツイントールをソファアの上で泳がせながら悶えだした。

切っ先がツルツルとした秘粘膜を擦り動く度に、晴樹の股間からは強烈なくすぐったさが走り、下半身をジワジワと痺れさせてくる。

挿入ではない性器同士の愛撫に、二人の呼吸は熱を孕んでリビングに響き、待ちきれなくなった彼女の秘孔から、コブツと愛液が溢れてソファアを濡らしていく。

「こ、ここに……あつたっ！」

「ふうあんんんっ?！」

何度か腰を動かしてペニスを動かし、秘粘膜の中で少し硬い処女孔を見つけた瞬間。思わず叫んでしまった。

切っ先を押し付けた秘孔は、ヒクヒクと蠢きながら亀頭をくすぐり、大量の愛液をまぶしてくる。

「挿れるよ、恵莉那」

「んっ……はあはあ……う、うん」

少し怖がっているツインテールメイドの顔を見ながら、腰をゆっくり前に動かした。

「ひくっ……うっ……ひゃんんっ」

このまま処女膜を破って根元まで挿入できる。と思っていたが、予想以上に彼女の入り口が硬い。

小さな秘孔を一瞬こじ広げられたものの、溢れ出してきた愛液で亀頭がすべり、秘粘膜を擦って淫核を弾いてしまった。

「あ、あれ、もう一回……」

「あ……ひゃふっ、ふうあんんんっ！」

また秘孔からすべって秘粘膜を擦り、包皮から女芽を剥き出しながら弾いてしまう。

「ご、ごめん。今度こそ……」

慌てて亀頭を元の位置に戻し、今度こそと秘孔を突き上げようとした直後。

「そ、そんなに慌てなくていいから……」

彼女が青い瞳で見つめながら話しかけてきた。

「こ、ここだから、わたしの……。だから、今度はちゃんとハルくんのを……」

今度は失敗できない。そんな風に考えていたのが分かれてしまったらしい。

恵莉那が瞳を伏せながら細指で秘孔を広げ、切っ先に押し付けてきてくれた。

亀頭には新たな愛液と、膣口近くの壁が触れ、焦燥感を煽るくすぐったさがペニスから背筋に伝わってくる。

「え、恵莉那っ!」

ズニユツ!

「はうううっ!!」

恥ずかしがりながらも秘孔を広げた彼女の姿。そして、わずかながらも切っ先に感じた膣の感触に我慢ができず、晴樹は正常位で思いつきり亀頭を挿入してしまった。

異物を挿入され、苦しげに息をする恵莉那の呻きが聞こえてくる。

だが、彼女を氣遣う余裕がない。

藍香とエッチした経験があるため、膣内の気持ちよさをある程度予測していたが、恵莉

那の中は完全に違う作りだった。

大人びたメイドの優しくペニスを包み、膣壁で肉幹を舐め絡んでくる動きではなく。ツインテールメイドの膣内は狭く、挿入した切っ先を潰すような締め付けだ。

「す、すごっ」

「くはっ、ううっ……くひいひいっ！」

強い締め付けと、奥に挿入したらもっと強い刺激を感じさせてくる膣内の動きに、腰が自然と前に動きペニスを突き刺していく。

ズリュ……ジュリュジュブ……ジュリュ……ズブ……。

突き刺していくペニスには、膣壁が巻き付くように絡まり、無数の膣粒が肉幹を擦りあげてくる。

「いいよ、恵莉那の中。すごきつくて……っ」

「くはっ、はあはあ……嬉し……い……くう……あう……はあううっ!!」

挿入を拒絶するように締め付けてくる膣壁を拡張させていた龟头に、薄い膜がぶつかってきた。

恵莉那も処女喪失の瞬間を感じたらしく、青い瞳を震わせている。

「痛くならないようにするから」

コク……。

なんにも言わず、ただ頷いた彼女の緊張した顔を見ながら腰を動かさし、ペニスをゆつくり

と押し込んだ瞬間。

プツッ……ジュプジュプズリユジュプジュプッ!

「はくっ?! あひ……ひくうううううううううううう——ッ!」

亀頭にピツタリと張り付いた処女膜が軽い音とともに裂け、吸い込まれるようにペニスの根元まで飲み込まれてしまった。

肉幹に巻き付いてくる膣壁と、潰すような膣壁の締め付けに、頭の中が一瞬で真っ白にされていく。

もっと優しく彼女に挿入しなければいけないと分かっている、ペニスから伝わってくる強烈な痺れに、腰の動きがとめられない。

初めての挿入で苦しむ彼女の肌は大量の汗でヌメ光り、呼吸に併せて大きく揺れる肉果の頂が、小刻みに震えていた。

胸元を広げてミニスカートを捲り上げたメイド服は、大量に噴き出した汗で肌に張り付き、肢体のラインを完全に浮きださせる淫らな衣装となつて恵莉那を彩っている。

「くはッ、んう……はあはあ……あくうううッ」

リビングには苦痛を我慢する彼女の呻きが響き、ペニスを包む膣壁がぎこちなく蠕動して肉幹を扱ってきた。

肉幹はムズムズとしたくすぐったさに包み込まれ、切っ先から溢れる先液が涎のように滴り、金髪美少女の胎内に染み込んでいく。

「惠莉那の中……、きつくて、そんなに締め付けられたら、僕すぐに……」

「はくッ、くうッ……ひッ……そ、そんなこと言われても……、わたし締め付けてなんてな……うくッ」

ジュプッ……ジュズッ、ジュプッ……ジュプジュプ……。

痛みに耐えながらも、彼女が潤んだ瞳で「もっと激しくして」と伝えてきた。

その瞳に彼の腰はとまらなくなってしまう、秘孔を捲り返しながら、激しく膣内を貫いて肢体を揺り動かしてしまう。

部屋には淫らな挿入音が響き渡り、秘孔を突き上げる度に揺れる肉果実が、晴樹の興奮を我慢できないものに変える。

「感じさせてあげるよ、惠莉那を感じさせて、エッチな声いっぱい出させてあげるよ」

「な、なにを言つて……はふッ……んッ……ひいうッ……」

ツインテールメイドの感じている声を早く聞きたくなってしまう、揺れる肉果実を見ながら一際深くペニスを挿入し、ヒクついていた子宮口に切っ先を突き当てた瞬間。

「んッ、ふうああッ！ はふッ……な、なに？ 急に……痛いのに……はうッ、あッ……くうんッ、ひゃふッ！」

突然彼女の肢体が痙攣し、艶めかしい喘ぎ声を奏でながら、腰の動きに併せて桃尻を下に動かしてきた。

発情汗を噴き出していた白い肌は、薄赤く染まりながら艶めかしく光る。揺れる柔房の

頂で尖っていた薄ピンクの乳芽が、乳輪ごと膨れ上がって今にも弾けそうになっている。「はひッ、んッ……はああッ! ダメ……奥……奥まで入れられたらわたし……わたし
いいいいッ!」

肢体を突き上げる度に彼女の声が上がらず、金色のツイントールがユラユラと揺れながら、発情汗にまみれた肌に張り付く。

どうやら、完全に快楽が痛みを超えたようだ。

ペニスに巻き付く膣襞は、無数の膣粒を肉幹に擦り付けて扱き、子宮口は吸い付くように亀頭に被さろうとしてくる。

ペニスには早くもジンジンとした痺れが走り、肉幹の内部に強烈な痒みが襲ってきた。

「え、恵莉那……すごいよっ。もう我慢できないっ。恵莉那の全部、僕のものにしちゃうからなっ」

「んあッ! あひッ、わたし……わたしの全部……ハルくんの……ひゃんッ。い、いいよ……全部あげる……んッ、わたしの全部あげるから……あふッ!」

ジュプッ、ジュプッ、ジュプジュプッ!

もう抑えようとする努力なんて必要ない。

感情のおもむくまま腰の動きを速めた晴樹は、肉幹で秘孔を捲り返し、亀頭で大量の愛液を掻き出しながら子宮口を突き上げた。

冷たい態度だった恵莉那を自分のものにする。

その優越感に興奮が高まり、ペニスが一際大きくなっていく。

切っ先からは先液が何度も噴き出し、処女を喪失したばかりの膣襞や膣壁。そして子宮口にまで染み込ませてしまう。

「ッ……ふあんッ、はあはあはあ……もつと……もつと強くしても大丈夫だから……んッ。藍香さんよりも激しく突いて……わたしの中いっぱい……きゃんッ！」

先にエッチをしたメイドに嫉妬している恵莉那の願いを聞くように、ペニスを根元まで挿入して子宮口を突き上げ、二つの肉果実を揉みながら、乳輪ごと膨らんでいる乳芽に吸い付いた。

今の彼にできるすべて愛撫。その行為に、彼女は如実に反応して肢体を痙攣させ、甲高い声を奏でながら、肉幹を唾える秘孔から愛液までしぶかせ始めた。

狭い膣に締め付けられたペニスには射精感が込み上げ、肉幹が脈動しながら濁液を駆け登らせようとしている。

「くっ、恵莉那の中、気持ちよすぎて、僕もう……もう出ちゃいそうだよっ」

「えッ……はあうッ！ 出すって……いい、いいよ……中に、わたしの中いっぱい出して……はあはあ……全部ハルクんの……ハルクんのものにしてッ！」

ジュプッ、ジュプッ、ジュプジュプッ！

淫らに潤んだ瞳で見つめられながらあだ名で呼ばれる度に、晴樹の心臓はドクンと高鳴り、ペニスの脈動が速まっていく。

ご主人さまではなく、崎元晴樹という個人を好きだと言ってくれる彼女の存在が心の中で広がり、永遠に自分のものにしたという欲望で、頭の中がいっぱいになってきた。

秘孔を捲り返すペニスのピストンは、脈動の感覚を短くしながら何度も震え、今にも射精しようとして狭い尿道に濁液が駆け登っていく。

「んッ、あッ……はああッ！ な、なに……ひゃふッ、ハルくんのがビクビクして……大きく……大きくなってるッ」

脈動を速め、射精に向けて肉幹を太くさせていくペニスの異変に気づいた恵莉那が、驚きながら青い瞳を震わせた。

ペニスのピストンに併せて動いていた桃尻がとまり、未知の感覚に耐えるように、両手がギュッと乱れたメイド服を掴む。

「大丈夫だから、大丈夫だから我慢して」

「う、うん……はうッ、あッあッあッ……ふあああッ！」

なにが大丈夫なのか自分でも分からないが、彼女の怯えを取り除くように囁いた晴樹は、上半身をピツタリと重ね合わせて腰を動かしまくった。

恵莉那も言葉を感じたように桃尻を再び動かし、彼の首に腕を絡めて甲高い声で喘ぎながら、部屋に淫らかな声を響かせ続けている。

二人の身体の間で潰れた丸い肉果実は、秘孔を突き上げる度にグニグニと歪んで揺れ動き、限界まで尖った乳芽と膨らんだ乳輪を、彼の身体に擦り付けていた。

乱れたメイド服を揺れ動かす肢体は、大量の汗をソフアーにまで伝わせて汚し。ニーソックスに彩られた太腿には内腿筋が浮き上がって、いやらしい痙攣を開始した。

「んッ、はふうううッ！ す、すごいのだ……ッ、胸も……胸もアソコもおおかしくな……わたし壊れちゃう……わたしおかしくなっちゃうよおおッ！」

狭い膣を激しく貫き、子宮口まで突き上げるピストンと、身体の間で潰れた肉果実の刺激に、彼女も限界に達し始めたようだ。

声が上がらず、膣内が一斉に奥へと向かって蠢きだした。

膣壁に巻き付かれた肉幹は、狭い膣壁に締め付けられながら無数の膣粒で激しく扱かれ、秘孔が肉幹の根元をきつく喰い締めてくる。

「やばっ、出る……出る……っ」

「ふあッ、くうんんんッ！ 来て……早く……早く出して……早くううッ！」

強烈な締め付けで膣に扱かれたペニスが、もう我慢の限界だ。

速まった脈動がペニス全体に悦痺れを走らせ、限界まで膨らんだ亀頭が尿意にも似た焦燥感で包み込まれた。

尿道は激しいくすぐったさとともに濁液を駆け登らせ、先液がとまらずに噴き出し始めた切っ先が、どんどん広がってしまう。

射精直前の激しい膣突きを受ける彼女も、全身を半痙攣させながら何度も嬌声を張り上げ、二人の身体の間で潰れた肉果実をプルプルと震わせた。



子宮は絶頂と同時に収縮を繰り返し、子宮口に詰め込んだ亀頭から白濁液を吸い出し続けてくる。

「くおっ、くっ……うおおおっ！」

「はうッ、ッ……ひやくううッ！ んッ……あッ……はああッ！ あッ……ふあん
んッ……ああ……はああはあ……ッ……はああ……」

膣に扱かれ、子宮に吸い出されるように最後の一滴まで彼女の中に放出させ、やっと理性が戻ってきた。

しかし、藍香はまだ絶頂が終わってないらしい。

対面座位のまま背中を仰け反らせて大きな肉果実を揺らし、膣内と秘孔でヒクヒクと肉幹を締め付けながら、滑らかなお腹を波打たせている。

「藍香、気持ちよかったよ」

「ご、ご主ひんひゃま……ッ……んあッ……」

まだ弛緩痙攣を繰り返している大人びたメイドが、美峰乳を押し付けるように体重を預けてきた。

子供のように彼の胸の中で痙攣している彼女の姿に、晴樹は愛おしさを感じてしまい、まだ膣内に挿入したままのペニスがビクンと脈打って、新たな精液を迸らせてしまう。

「ずるい……ずるいよハルくん。わたしだけ、わたしだけまだ……」

藍香の膣に夢中になっていた彼に、恵莉那が泣きそうな顔で話しかけてきた。

彼女の膣を貫いたままの右手は、嫉妬と得られなかった肉欲でキュウキュウと締め付けられ、うっ血してしまいそうな痛みに襲われている。

「恵莉那……」

じゅぽっ。

「んあッ!? んっ……はあはあはあ……」

やっと絶頂を終わらせた藍香からペニスを引き抜き、ベッドに寝かせてツインテールメイドを見る。

彼女の秘孔を突き刺している指が、愛液でベトベトだ。

しかも、秘孔からはダラダラと女蜜が滴り、指に絡み付く膣壁が、ペニスを挿入したあとの快楽を教えてくる。

「あ、まだ……まだそんなに……」

精液と愛液でベトベトになっているペニスを見つめた恵莉那が、硬いまま勃起しているのを喜んで笑みを浮べ、青い瞳を震わせた。

「今度は、今度はわたしに……、ハルくんのが欲しくて、もうこんなになってるんだから……早くここに……んっ」

艶めかしい声で秘孔から指を引き抜いた彼女が、見せるような仕種でショーツから片脚を引き抜き、ベッドの上で細脚をM字に広げて大事な部分を披露した。

見せられたエッチと、指での愛撫で十分準備が整っている金髪美少女の淫部は、淫唇を

プックリと膨らませて薄赤い秘粘膜を晒し。ヒクヒクと口を開閉させている秘孔が、内側から何度も盛り上がって挿入を待ち望んでいる。

「恵莉那も僕のものに……」

仰向けに転がり、ポツカリと空いた秘孔から精液を溢れ返す藍香を横目に、まるで操られるようにツインテールメイドの肢体に向かつていく。

「ハルくん……わたしにも早く……んんっ。あっ……ひゃんっ、ふうあ……」

軽くキスをして胸を揉み、唇を下に移動させながら限界まで尖っている薄ピンクの乳芽をしゃぶり、そのまま淫部に顔を近づけて埋める。

彼の顔は女の子の香りとムツとした女熱に包み込まれ、本能の命じるまま舌を這わせて白ピンクの女芽を剥き出し、ヒクつく秘孔の淵を舐めた途端。待ちきれなくなつた愛液が噴き出して、晴樹の顔を直撃してきた。

「んあっ、ご、ごめんなさいっ。顔に……」

汚してしまったと思つた彼女が、泣きそうな顔で話しかけてくる。

「別に気にしてないよ。それよりも……」

顔にかかった熱い女蜜で、射精した直後にもかかわらずペニスが疼き始めてしまった。

彼女も脚をM字に広げたまま閉じようとはせず、恥ずかしそうに幼さの残る美貌を染めたまま、右手で秘孔を広げて挿入を待っている。

「は、はやくしてよっ。こんな恰好、死にたくなるほど恥ずかしいんだからっ」

彼女らしいセリフだが、柔らかい言葉遣いに気持ちいが伝わり、興奮が高まっていく。

「え、恵莉那の中にも……」

彼女の淫らな姿に誘われるように動き、ペニスを握った直後。

「ダ、ダメ……です。はあはあ……ご主人さまの、ご主人さまのペニ……スは、私だ……
けのモノで……す。ですから、もう一度……ここに……」

未だに弛緩している藍香が突然起き上がり、這うように動いて金髪メイドの隣に座り、張り合うようにショーツから片足を引き抜いてM字開脚してきた。

もう一人のメイドと同じように細指で広げられた秘孔はヒクヒクと膣口を開閉させながら白濁の絡まった内壁を晒し、蠢く膣襞まで見せてくる。

「ハルくん。わたし……わたしに挿れて……」

「ご主人さ……ま、私に……ご主人さま……のペニスを……、また……」

同じ体勢で細指を淫部に当てて自ら秘孔を広げている彼女たちの姿に、生唾を飲み込んでしまう。

だが、二人の表情が決定的に違った。

恥ずかしそうに幼さの残る美貌を背け、潤んだ瞳を横に向けて見つめてくる恵莉那に対し。一度エッチした藍香は、体力を失って今にも倒れてしまいそうな状態ながらも、余裕ありげに笑みまで浮べて、蕩けたヒスイ色の瞳で彼を誘っている。

内に秘めている性癖を表す彼女たちの秘孔からは白濁液と白みがかかった愛液が絶えず溢



れ、ベッドシートに淫らな染みを広げていく。

「ぼ、僕は……」

二人の姿に興奮が高まり、肉幹が再び脈動し始めてしまう。

両方とも挿入したいという気持ちがあるが、エッチしたばかりの赤髪メイドよりも、必死に挿入を求めて秘孔を蠢かせている金髪メイドの方に、気持ちが傾いている。

晴樹はゆつくりと恵莉那の前に行き、彼女が広げている秘孔に切っ先を押し当てた。

「そんな……な、ご主人さ……ま、恵莉……那より……わ、私に……」

「じゃあいくよ、一気に奥まで挿れるからね」

「う、うん……はうっ!!」

ジュプッ、ジュプジュプジュプ……ジュプジュプジュプツツツ!

「くはッ、あッ……ひゃふうううううううううううう——ッ!」

藍香の非難が聞こえる中、恵莉那の気持ちに応えるように亀頭で秘孔を押し広げ、一気に根元まで挿入して子宮口を突き上げた。

ツインテールメイドの肢体は挿入と同時にビクビクと震え、大量の発情汗を噴き出しながら、ものすごい膣圧で肉幹を締め付けてくる。

簡単に最奥を叩いてしまった亀頭は、そのまま蠢く子宮口をこじ開け、切っ先を聖域にまで詰め込んでしまった。

「あふあッ……ひゃひッ……入れられたただけなのに……わたし……——ッ!」

恥ずかしそうに青い瞳を閉じた彼女が、真っ赤な顔を背けている。

「そんな顔、可愛すぎるってっ」

「え？ あ……な、なに!? きやうッ、きやあああああああああッ！」

恥ずかしがる顔が、どんな男でも一瞬で虜にするほど可愛い。

晴樹は感情を抑えられなくなってしまい、脚をM字に開いていた彼女の肢体を押し倒して、激しく腰を動かし始めてしまう。

正常位で突き上げる彼女の肢体は、お椀型の肉果実とともに激しく揺れ動き、メイド服の捲れたミニスカートから、ペニスを挿入している秘孔が丸見えの状態だ。

長いツインテールをシーツの上で泳がせ始めた彼女は、やっと受け入れられた快楽に顔を振り、シーツをギュッと握って濡れた嬌声を部屋に響かせていく。

「可愛いよ恵莉那。すべてが丸見えで、もう興奮を抑えられないっ」

「はうッ、はあはあ……あうッ。つ、突いて……もつと激しく……はふッ、壊しちゃっていいから……ハルくんので壊れちゃってもいいから、藍香さんより激しく突いてッ！」

ジュプッ、ジュプッ、ジュプッ、ジュプッ！

青い瞳に涙まで浮かべる美貌を見ながら、晴樹は腰を動かして秘孔を貫いた。

きつく、狭すぎる膣内は、彼女の気持ちに反応するようにキュウキュウと収縮蠕動を繰り返して肉幹を締め付け、無数の膣粒が付着した膣壁が、ペニス全体を絡み搾るように扱ってくる。

「ふあああッ、あふッ……こんな……こんな奥にまで……恥ずかしいのに……わたしのアソコが見られてて恥ずかしいのに……わたし……わたし……わたしッ！」

肉幹を啜えて歪む秘孔を見られる恥ずかしさに、金髪メイドの瞳に涙が浮かぶ。だが、肢体を隠そうとはしない。むしろ、M気質が完全に目覚めてしまったように淫らな姿を晴樹に見せ、さらなる快感に声を上ずらせていく。

ピストンを繰り返して貫いている膣内は、肉幹に吸い付くように秘孔が捲れる度にキュンキュンと収縮し、子宮口が切っ先にキスを繰り返して来る。

ニーソックスに彩られた太腿には、内腿筋が浮き出して艶めかしく震え、秘孔から溢れ出した愛液が、漏らしたようにシーツの染みを広げた。

「すぐにイカせてあげるよ。恵莉那の中にもいっぱい出して、僕だけのメイドにしてあげるからねっ」

「はふッ、んッ……もう……もうハルくんだけのメイドなのに……んひッ、わたし……もうハルくんのものなのに……あふッ、あッあッ……ひゃんんんッ！」

女の子を、それも美少女メイドを激しく貫く快楽に、際限なく興奮が高まっていく。

頭の中は血でいっぱいになり、もう自分ではとめられないほど激しく腰を動かして、小さな秘孔を捲り返してしまった。

羞恥によって快楽を感じ始めた彼女も、両手でシーツを掴みながら喘ぎ、桃尻を上下に動かしてペニスのピストンに応えてくれる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。未満の方購入できません。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索

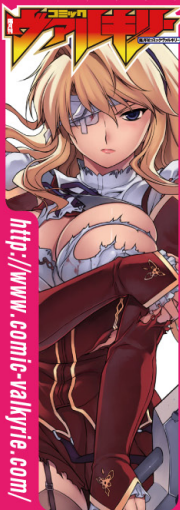


電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!